

故飯田宗一郎名誉館長をしのぶ会

平成12年10月1日(日)

平成十二年十月一日、大学セミナー・ハウスにおいて、平成十二年一月二十六日に逝去された飯田宗一郎名誉館長をしのぶ会が開催されました。当日は旧名という多数の方々にご列席いただき、しめやかな中に故飯田名誉館長をしのぶにふさわしい会を執り行うことができました。ここにご遺族ならびにご列席の方々、生花、お花料をお寄せくださった方々(下記)、お話を演奏・甚句などご協力くださった各位に厚く御礼申し上げます。

大学セミナー・ハウス 理事長 中嶋嶺雄
館長 絹川正吉

故飯田宗一郎名誉館長をしのぶ会プログラム (敬称略)

第一部 しのぶ会 (13:30~15:00) 講堂

司会・国際基督教大学学長

大学セミナー・ハウス館長 絹川正吉

奏楽(オルガン)・・・キリエ、永遠の父なる

神よ BWV672 (J.S.バッハ作曲)

全ての世のなぐさめなるキリストよ

BWV673 (J.S.バッハ作曲)

キリエ、聖霊なる神よ BWV674 (J.S.バッハ作曲)

黙祷

故人紹介と追悼のことば

島根県立大学学長

大学セミナー・ハウス常務理事 宇野重昭

弔辞

東京外国語大学学長

大学セミナー・ハウス理事長 中嶋嶺雄

日本国際問題研究所理事長 小和田恒

元常任理事・評議員 鈴木 皇

スライド

思い出を語る

一橋大学名誉教授 板垣興一

作家 篠田節子

日本女子大学カウンセリングセンター

名古屋大学助教授 粟本英和

遺族挨拶 飯田能子

故人の長女

第二部 記念の集い (15:30~16:30) 食堂

司会・神奈川大学教授 松山正男

相撲甚句 須能邦雄

石巻魚市場(株)専務取締役

三輪学苑受講生

日本ゼオン(株)監査役

三輪学苑受講生

東京女子大学名誉教授

大妻女子大学理事長

大妻女子大学学長

大学セミナー・ハウス常務理事

交流 佐野博敏

唱和「神ともにいまして」

挨拶・閉会

国際基督教大学学長

大学セミナー・ハウス館長

絹川正吉

生花、お花料をお届けいただきました。謹んで厚く御礼申し上げます。(敬称略)

向坊隆、今井栄、佐藤潔、出正子、犬塚博・久子、戸張よし子、石川洋二郎、浅野正行、伊藤清子、高橋薫、奥島孝康、荻上絃一、加古川淳一郎、坂本光子、佐野博敏、滝澤栄二郎、田島恵児、田島澄江、田中千代子、土井恵美子、十市佐和子、中川秀恭、中富光国、根岸愛子、福田一郎、古田土節夫、丸山友一、山下幸夫、山岸健、吉阪正邦、吉田光孝、吉田幸弘、若林三枝子、倉郷環境対策協議会、津田塾大学、(福)王樹会、特別養護老人ホーム多摩シルバーハウス、(有)天学セミナー・ハウス食堂

弔辞

東京外国語大学学長

大学セミナー・ハウス理事長 中嶋 嶺雄

飯田さん、とあって呼ばせていただきます。飯田さんはやっぱり、この八王子の丘に戻って来られましたね。それは当然のことであり、またそうあって欲しかったことでもあります。もう四〇年近くも前、まだ大学セミナー・ハウスが産声をあげる以前、昭和三七(一九六二)年の秋頃から、すでに飯田さんの構想の中にあつた大学セミナー・ハウスの土地を求めて、多摩丘陵のあちこちを歩き回り、一面に薄が穂をなびかせていた南多摩郡柚木村中山地区のこの小高い丘を建設適地として探し当てたのも、ほかならぬ飯田さんなのですから。

飯田さん、私たち大学セミナー・ハウスに縁を結び、飯田宗一郎という誰の胸にも深く刻印されている個性豊かで類い稀なる人生の師との出会いを大切にされる多くの人々が、今日、この丘に集い、「故飯田宗一郎名誉館長をしのぶ会」を催すことになりました。今日のこの日が大変遅れましたことは深くお詫びしなければなりません。大学セミナー・ハウスは今再び、ハウスを創設した飯田さんの哲学と精神、そして何よりもあの実行力に



SEMINAR HOUSE NEWS

セミナー・ハウス

No.160

2000.7・8・9
10・11・12合併号

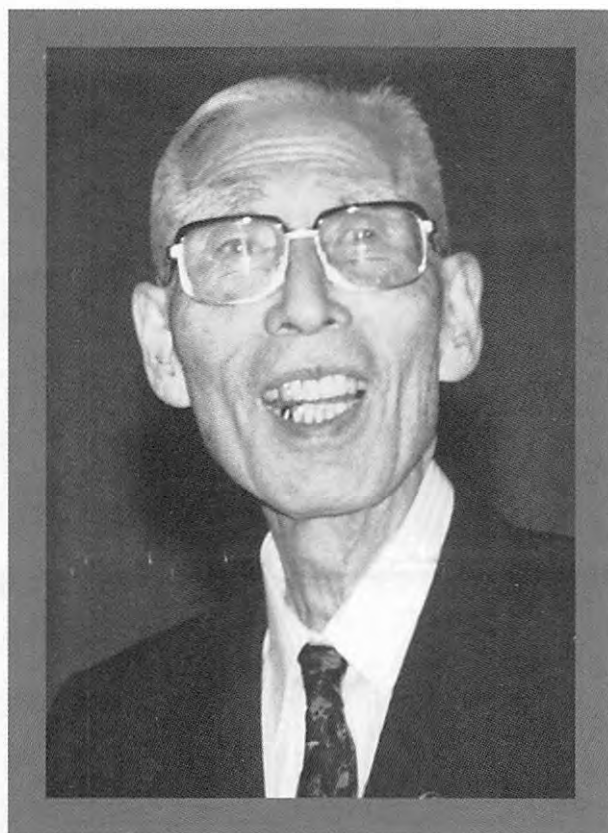
■故飯田宗一郎名誉館長をしのぶ会 / 2・3・4・5

■教育プログラム報告

- 第37回大学教員懇談会 /6
- 第7回土曜セミナー /6
- 第3回大学職員研修プログラム /7
- 第1回フィールドワーク体験セミナー /7
- 第20回大学教員研修プログラム /8
- 第184回大学共同セミナー /8
- 第27回国際学生セミナー /9
- 第1回宿泊大学説明会 /9

■法人ニュース

- 理事会・評議員報告 /10
- 教育プログラム委員会報告 /10
- 寄贈図書・寄付 /10
- わたしたちの合宿①② /11
- 私の国際交流 /12
- ご利用状況 /13・14
- 今後の主催プログラム開催予定 /14
- 館長室から /14



Plain living and high thinking

財団法人 大学セミナー・ハウス
INTER-UNIVERSITY SEMINAR HOUSE, INC.
ホームページ <http://www.mesh.ne.jp/iush/>



本館建設工事現場視察 (S.39.12.9)

学びつつ、新しい世紀の到来に対応し得る大学セミナー・ハウスとしての体制を整えようとしていることを報告させていただきます。ですから飯田さん、どうか心安らかにいつまでもこの八王子の丘にとどまって、大学セミナー・ハウスを、そして私たちを見守っていて欲しいのです。

飯田さんが、大学セミナー・ハウスの立ち上げを構想され、開設されるまでの足跡については、創立十年・開館七年を記念して編まれた当ハウスの「大学を開く」が詳しく記録しております。飯田さんの偉大な功績につきましては、ここで改めて申し述べる必要もないのですが、わが園がいわゆる高度経済成長を始め、大学の大衆化・マスプロ化が進みつつあったとき、「合宿的集団生活」の持つ意味の大きさを体現する大学セミナー・ハウスという名称自体が、飯田さんの「潜在精思の創造語」であるという一事をもってしても、飯田さんの先見性はまさに歴史的だといっても過言ではありません。

そして飯田さんの同志であった日本女子大学長の上代たの先生が当ハウスに寄贈された新渡戸稲造の筆による「上善如水」の額の言葉が示すような、クエーカー教徒としての飯田さんの最良の奉仕というその心に共鳴した実に多くの大学人や財界人が飯田さんを支えたのでした。東京大学総長の茅誠司先生、早稲田大学総長の大浜信泉先生、三井銀行の佐藤喜一郎会長をはじめ、わが国の代表的な人士がキラ星のように飯田さんを囲んでいました。こうして大学セミナー・ハウスは国・公・私立の隔てない大学間の文字通りの共同利用施設になったのであります。東京大学名誉教授で、当ハウスの初代企画委員長をつとめられた手塚富雄先生が語っていたように、大学セミナー・ハウスは、「飯田宗一郎という人が、その熱意で無から有を生じたもの」であったのです。

そのご苦労が並々ならぬものであっただけに、また飯田さん一流の徹な性格ゆえに、飯田さん是一方で、ごく近くにいた人や飯田さんを強く支

えてきた方々とはしばしば抜き差しならぬ関係になったことについても、ここで若干回想させていただくことをお許しください。あれは私が国際プログラム委員長を仰せつかった頃の昭和55、56(一九八〇、一九八二)年のことだったと思います。文部大臣も務められた永井道雄先生も同席された国際プログラム委員会の席上、飯田さんが理事長の茅誠司先生を激しく論難され、議長の私は大変困ってしまつて、私が専門とする中国政治の毛沢東家父長体制の功罪を例にとつて、なんとかその場を収拾したことがあります。そんなこともあつてか、茅先生のご要請で私が神宮前の茅先生のお宅をお訪ねしたこともありました。いずれにしましても、大学セミナー・ハウスにすべてを打ち込まれた飯田さんならではの事柄であつた



中嶋 嶺雄理事長

と思われま

す。こんな経緯もあつて飯田さんはやがて大学セミナー・ハウスを実質的に離れられたのですが、自らの理想をさらに求めて昭和58(一九八三)年には三輪学苑を創設され、生涯教育の先駆けを見事に担つて、再晩年に至つてもなお若々しい情熱を

燃やされたのでした。本日は当ハウスの千人会の方々とともに三輪学苑で学んだ方々も多数出席しております。

飯田さんに私をはじめしてお目にかかったのは、一九七〇年代初頭に国際学生セミナーをお手伝いするようになってからでした。最後にお目にかつたのは、昨年11月の東京外国語大学独立百周年(建学126年)記念式典にわざわざご出席くださったときでした。そのとき「府中新キャンパスのオープンングにも行きますよ」と語つておられたのに、そして私共の新キャンパスはこの9月27日にオープンング・セレモニーを催したのですが、飯田さんに見ただけでなかったのが残念でなりません。もうあの独特の筆致のお手紙やお葉書もいだけなくなつてしまつたのですが、イイダ・スピリットは必ず継承し、次の世代にお伝えするとともに、新しい時代の大学セミナー・ハウスの発展に関係者一同が最善の努力をすべきことをここに誓ひして、送別の言葉とさせていただきます。飯田さん、長い間、本当にありがとうございました。

吊辞

日本国際問題研究所理事長 小和田 恆

私が飯田さんの訃報を受け取つたのは、二〇〇〇年の1月、ちょうどハーバード大学で集中講義を行つていてときでした。深い雪に包まれた大学の構内を歩きながら私の頭の中には飯田さんとの長年にわたつたお付き合いが走馬灯のように去来いたしました。

考えてみますと私が飯田さんとの最後の別れのお祈りをしたのがハーバードだったというのも奇縁のように思われます。飯田さんとはじめてお目にかかったのは一九七三年のことでした。日本で大学を卒えた後イギリスのケンブリッジ大学で学んだ私が、ほんとうの大学とはこういうものかと



テニスコート開き (S.43.6.29)

いう深い感銘を受けて帰国した印象がまだ鮮明だった頃でした。大学のあり方についてケンブリッジでの体験をお話したことを覚えています。先生と学生が師弟として人間として切磋琢磨しあう場としての大学というものにはじめて出会ったときの強烈な印象をお話して、日本の大学のあり方について色々と語り合ったのが、飯田さんのお近づきの始まりでした。私は飯田さんの大学セミナー・ハウスの思想に共鳴して、仕事の分野をこえてお手伝いすることを約束したのでした。その後間もなくして私がハーバードに招聘教授として招かれるという話が出たとき、飯田さんは「日本のため、大学のために是非頑張ってください」と私を励ましてくださいました。このとき、私と飯田さんの間はぐっと近づいたのです。私たちは大きな年齢の差をこえていわば同志という気持ちになりました。ハーバードが一つの縁になったのでした。

飯田さんが生涯におやりになったことは、大学セミナー・ハウスや三輪学苑のように有形のものや更にもっと目に見えないさまざまなものとして残っています。日本の大学の在り方を変えた大学セミナー・ハウスは勿論のこと、人は人間としてどう生きるのかというテーマを学ぶ場として三輪学苑を創られたのも同じ問題意識だったと思います。どちらについても、微力ながら私もお手伝いの一端に関わりました。今日ここにはそうした大学セミナー・ハウスや三輪学苑に関わった方々が、飯田さんとのそれぞれの思い出を抱いて座っていらつしやることと思います。私も皆様と同じように今日こうしてこの席に列なつて、飯田さんの偉大な業績とその真摯なお人柄を思い出しているのです。

飯田さんはなによりもまず人間を愛する人であり、ヒューマニストとして力いっぱい生きていらつしやいました。これが飯田さんという人を形作る第一の特徴であったと思います。第二に飯田さんはすぐれた宗教者でありました。よく知られて

いるように、飯田さんは敬虔なクエーカー教徒でした。しかし、単なる熱心な宗教心をもっておられたというだけでなく、飯田さんは本質的な意味で何事に対してもミッシヨナリー・スピリットとでもいうような精神をお持ちだったのでないかと思うのです。宗教の具体的な内容に忠実であるというよりは、気持ちとしてのミッシヨナリー・スピリットというものを人生を駆り立てる情熱として本質的に持つておられる方だったのでないかと思うのです。第三に飯田さんは類い稀な教育者であつたと思います。理想を實踐にうつす実践者でありました。私が自分の学生を連れてこのセミナー・ハウスに伺うとき、飯田さんはいつも食事の席に姿を現わされ、学生達に対して人間として生きるということの大切さをお話し下さつたことをはつきり思い出します。それはこういう飯田



小和田 恆氏

さんの本質をあらわす一例だつたと思います。私が最後に飯田さんにお会いしたのは喜寿のお祝いのときでした。その後も昨年の暮にお便りを頂戴しました。三輪学苑の教え子だつた方のため私に協力を求めて来られたのでした。最後まで

日本のこと、世界のこと、そして人間のことを考えておられたのだと思います。飯田さんにはこの大学セミナー・ハウスや三輪学苑だけでなく、日本の社会を変えていくためにいろいろな形でこれからも御努力をお願いしたいものと思つておりました。それだけにお亡くなりになつたことが残念でなりません。

飯田さんは可能性の限界まで力を尽くす生き方、あくまでも自分の信念を貫いて生きる人間としての生き方を通して、私たちにいろいろな思い出を作ってくださいました。今日はそのこと心からお礼申し上げ、安らかにおやすみになるよう皆様と一緒に祈りしたいと思つています。

弔辞

元常任理事・評議員

鈴木 皇

飯田さん、初めてお会いしたのはもう40年も前のことでした。それは大学セミナー・ハウスの設立相談会が箱根湯本で開かれたときでした。議論は沸騰し、かなり激しい反対論があつたにもかかわらず、飯田さんは落ち着いていました。おそらく理想実現の見取り図はでき上がつていて、それらの反対論は苦にならなかつたのでしよう。

設立後の第一回共同セミナーでは、設備の未完成的のところに雨になり、委員の永井道雄さんが泥道の中を宿舍の見回りをされており、さすがと感心したものでした。私も飯田さんの熱に取り付かれ、足しげく通い、年間最多利用者にまでなりました。

設立前は募金活動や建設事業、設立後も建物の拡張や補修、人事など難問は山積しました。そういう中で飯田さんは持ち前の気性からしばしば孤立しました。私は歴代の理事長とご縁がありましたので、理事長からの相談を受け、飯田さんとの間で善慮することもたびたびありました。時には精根尽き果て、帰宅の電車の中で失神したことも